

第 10 回アドバイザー・ボード会合の概要

「アドバイザー・ボード」の第 10 回会合の日時・出席者等については、以下に示すとおりである。

日 時：平成 23 年 3 月 1 日（火） 13 時 00 分～15 時 00 分

場 所：神戸大学六甲台本館 3 階大会議室

出席者：アドバイザー・ボード委員（五十音順，敬称略）

家次恒，江崎勝久，小椋昭夫，尾崎裕，金尾茂樹，高崎正弘，
田中文成，矢崎和彦

経営学研究科教員

金井壽宏，水谷文俊，黄磷，原拓志，忽那憲治，松尾貴巳，
櫻井久勝，正司健一，高嶋克義，松尾博文，平野光俊，
高橋潔，三矢裕，栗木契

（田村正美）

「アドバイザー・ボード」第 10 回会合では，研究科長の金井の司会により，以下の報告と議論が行われた。まず，会合に先立って新たにアドバイザー・ボード委員に加わった 2 人の委員が紹介された。そして，金井から大学を取り巻く制度環境および経営学研究科の現状について説明が行われた。特に，①初期の学部教育について「経営学入門」に加えて「経営学入門演習」が開始されたこと。②MBA 教育について「コーチング」や「ネゴシエーション」などの新科目も導入されたこと，また，京都大学と慶應義塾大学との連携による授業やワークショップを行ったこと。③社会連携関係について，経営学研究科が獲得した概算要求でスタートさせた，神戸大学梅田インテリジェントラボラトリにおいて経営グッドプラクティス・セミナーを連続して開催したこと，および，経営アクション・リサーチとしての経営外来相談等にも着手することが説明された。

次に，アドバイザー・ボード委員から，御意見，御提案，御批判等をいただきたいと考える具体的な活動について，各担当者が発表を行い，その都度アドバイザー・ボード委員から活発な質疑が行われた。

(1) KIBER Program について，松尾博文が説明

平成 23 年度からスタートするもので，毎年 25 人から 30 人が海外の大学で約 1 年間学び，かつ希望すれば 4 年間で学部卒業できるプログラムであることの説明があった。アドバイザー・ボード委員からは，以下の御意見をいただいた。

経営学部はこのようなことを行っていると認知させることが重要である。

仕組みとしての，KIBER Program は良いが，学生に元気になってほしいのだから，援助しすぎるのは，たくましい人間に育てるためには注意する必要がある。

NPO 法人アイセックジャパンに，経営学部卒業生がいるのでそのような人的ネットワークを活用すべきである。

アドバイザー・ボード委員の企業では，海外の現地法人でインターンシップを行ったり，デュセルドルフ，ボストン等で開かれる留学生ジョブ・フェア等で，留学している学生に接することが可能であるなどの具体的な御提案があった。

(2) 会計プロフェッショナル育成プログラムについて、櫻井久勝が説明

ここ数年の間に安定して合格者数の上位にはいるようになったこと、学生規模を考えると例年1位の慶應義塾大学に引けを取らないポジションにあることの説明があった。

アドバイザー・ボード委員からは、非常に良い制度であること、昔は会計学もアカデミックな気風のほうが強調されていたので、隔世の感があるとの御意見をいただいた。

(3) 特徴あるゼミ活動について、忽那憲治が説明

学生自らが調査協力企業に依頼し、実際に調査を行い、その企業の責任あるポストの方にプレゼンテーションをし、実践的に経営学を学ぶことについて説明があった。また、学生の実際の姿を御覧いただくために忽那ゼミの学生4人に直接質疑する時間を持たせていただき、キャリアパスや就職活動に関しても、アドバイザー・ボードと学生との間で積極的な質疑応答がもたれた。

以下の説明については、時間の関係で教員からの説明が中心となった。

(4) 学生生活活性化のための取組について、高橋潔が説明

「人は誰でもリーダーである」および「つなげる力とリーダーシップ」のワークショップを開催し、もっともっと若いときからリーダーシップに目覚める人たちを増やすことが、学生の元気、入社後の会社の元気、ひいては日本の元気につながることにについて説明があった。

(5) 経済産業省との産学連携人材育成プログラムについて、平野光俊が説明

このプログラムで開発された、企業とそれを導くリーダー育成に関するケースのうち3つのケースについて説明があった。